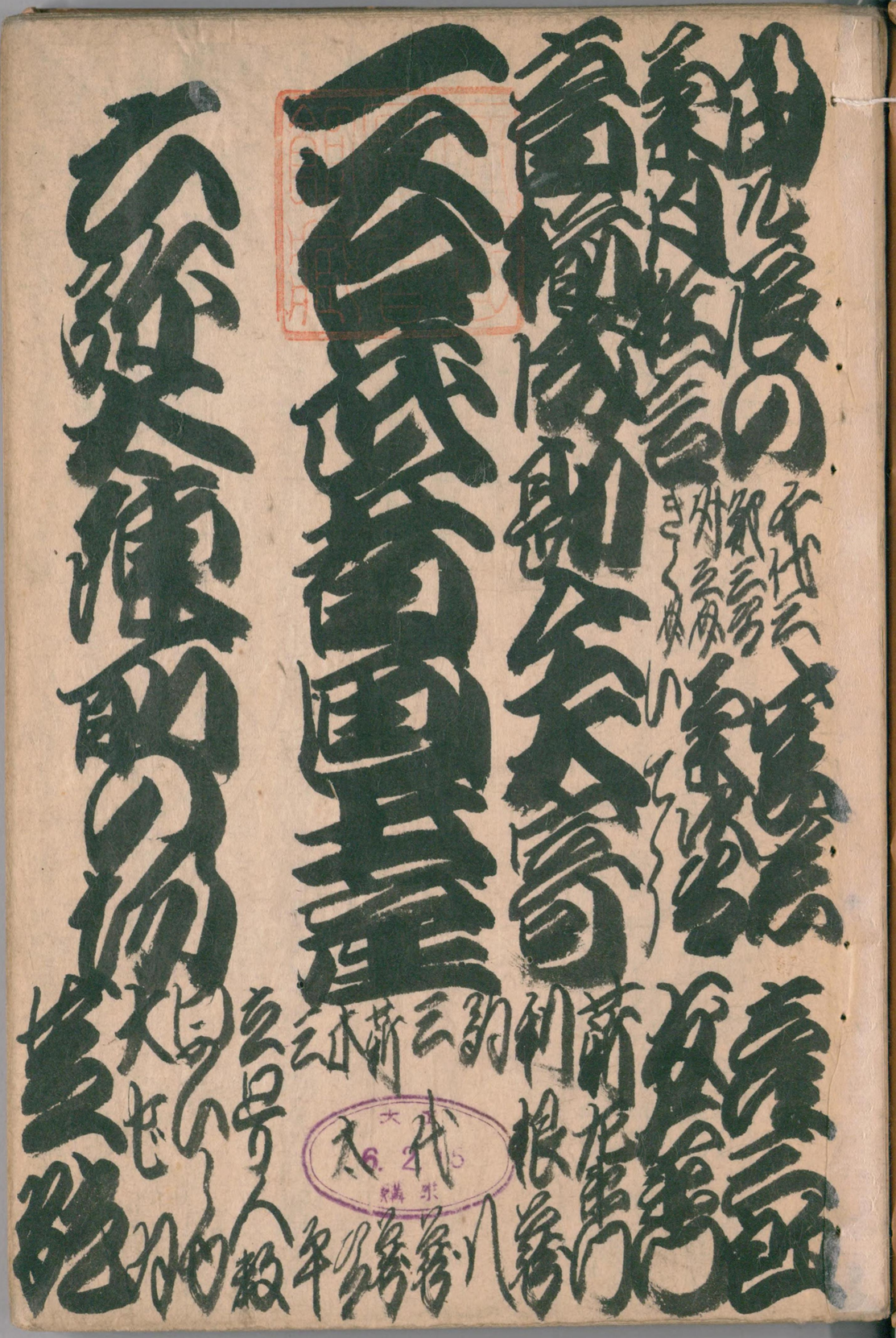
824
52
2

一谷武者畫土産繪本太功記 十三

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

今事重月

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

莉　やりく活性なる事の用がなくばいけど我くが浩亜へは以上が
木　は大度なるまで改りなくのかく過ぎるあれりの
二　我くが親の母の内事あるを用捨はなんぞ
莉尼　是ハ三ツやうまくいふ事なるのゞあまり此ゝゞの里で人呂兵の義門衛といふ武家の
軍ハ大勢の人数を世話をして居ゞや三人家を無く取扱つて世ゝ事なんぞ
莉　三人家ハ本様がこゝゞの里で人呂兵の義門衛といふ男が
木　あるゝ道は原様の御作で本事ハ来る夜本さ家の世話をハ成ゝ物ゝが
二　今度の軍ハ大勢の軍兵を本様が雇ひ入れさとの時
莉尼　勾備めんく無元ゝ軍勢は連れて来ても大地の百姓でなければ備ひが智恵
也へあちゝは百騎二ちゝは二百騎軍兵雑兵の二元のゝやうんの
莉　三人家ハ三雑兵軍兵の雇ちんの勘定を取ふ
三人　来ることいふのゝ
莉尼　左ほどけり四ツ三ツさん二家の大将の六郎左様へ籠持まはして田五平と云ふ三人
二ツはあゝが内の雇ひ四ツは原様の四軍ゝ人ゝ物ゝ手ゝ手柄が出つて此一浩様なる
家ハ雇ひ三ゝまゝ三ゝ人ゝ世話をしてとのゝ世話やきゝ成ゝ祝ゝの義ニ本ハ一笠庵の

莉　祝ゝ世ゝ時ハ成ゝ物ゝ筈を今日近所法を志ゝ人事理知ゝの田五平めつゝの御を
かき出しつて申ゝ時ハ後かいあん切りく家へ田五平めを引ぎりまして遅せてゆせん
成様ゝりや本様の云のがあゞこゝ三ツの田五平と申ゝ三家の男臣の実の兄弟
とのゝ
木　三ツで原様の名ハ小四男々ゆゝ今でハ楽人舞様と称ゝ寄てかつて死えたつ
だん
二　今日原様の病事祈りの三ツ為ハ生田の社へ主治の出当ゆゝ
莉尼　何といふ三人家ゝ田五平めハ三家の男様の兄弟でまでどうゝん出世をしてのゝ
莉　ヨリ様ゝ出ゝ物ゝが出ゝ様ハ恵ゝ遅て志つゝ以後ゝ
三木　三郎ハあんゝ道へもこけ事人を頼むぞ
莉尼　三人家ゝ田五平の場を待ち人志つゝあゝびに候ゝ時ハ成ゝ物ゝ
ト兄人は時間ゆまゝく
昨　親兄様の御帰り　ト与ぶ三人（二度）出て
三人　三ツや御帰りぞ〳〵　ト三度くる物ゝ此三人あて
廿三人　三ツ後ゝがぞとのいし出来迎ひ

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2

ガラス使用

ト云ふ
世之人　物ともいへば
笛　是のごとくの物でこれ迄ありと
世之人　申ども
笛　ノゝ子初てこれ迄
案　りあるかと云ふ同じ様な事ばかり
ぞつぐ下目ばかり
世之人　なさる
芝　ノゝ子初てこれ迄
系　是ほど様々の事ばかり
い　さうでこれ程の男ぶりはお目にかゝらぬ
笑　ろくでなしの当世風ばかり
一ぱんの物ばかりで
ト云内芝居ばやしにて

ト云内芝居ばやしにて

芝　ノゝ子初てこれ迄
系　是ほど様々の事ばかり
い　さうでこれ程の男ぶりはお目にかゝらぬ
笑　ろくでなしの当世風ばかり
一ぱんの物ばかりで
ト云内芝居ばやしにて

世之人　物ともいへば
笛　是のごとくの物でこれ迄ありと
世之人　申ども
笛　ノゝ子初てこれ迄
案　りあるかと云ふ同じ様な事ばかり
ぞつぐ下目ばかり
世之人　なさる
芝　ノゝ子初てこれ迄
系　是ほど様々の事ばかり
い　さうでこれ程の男ぶりはお目にかゝらぬ
笑　ろくでなしの当世風ばかり
一ぱんの物ばかりで
ト云内芝居ばやしにて

笑　ミダリ者物
系　是ほどの事ばかり
笑　ぬく田舎ものゝこし田舎
ト云内芝居ばやしにて

世之人　是ほどの事ばかり
笑　ぬく田舎ものゝこし田舎
ト云内芝居ばやしにて

笑　ミダリ者物
系　是ほどの事ばかり
笑　ぬく田舎ものゝこし田舎
ト云内芝居ばやしにて

世之人　是ほどの事ばかり
笑　ぬく田舎ものゝこし田舎
ト云内芝居ばやしにて

芝　ノゝ子初てこれ迄
笑　是ほど様々の事ばかり
ト云内芝居ばやしにて

芝　ノゝ子初てこれ迄
笑　是ほど様々の事ばかり
ト云内芝居ばやしにて

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

彦 [illegible]

秀 [illegible]

そ [illegible]

源人 [illegible]

彦 [illegible]

い [illegible]

秀 [illegible]

彦 [illegible]

勇人 [illegible]

彦 [illegible]

秀 [illegible]

その [illegible]

彦 [illegible]

[illegible] [illegible]

彦 [illegible]

[illegible] [illegible]

彦 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2

ガラス使用

案 まあ後やさしんおつきんが源平の戦ひにまるまれ手柄を取れさしい宮ってあらしんけれ
手柄ゆへ
手代 漣さんをはかりしびにまきみさい
ひて よろかど御れさはかりこの言ふ君
案 サテ手柄が出るとふみんとて
音 是はつへ漣ひく 勇者が手柄をまぐ出来ぐる
案 アイ有ア
音 御ぶい出ぞう○先は大体ぞが手柄をいつもむ事ぞ戴集に摂ま通し 漣や志賀の
那ハ物通ほしを苦長生るの
案 ○ア
音 イヤサ苦長生るの山様ぞが隣人 那ぶぐとおさる付ぶ浪手隣の合体子通し
屏風も須磨の浦ぞふ那ぞ紐まいコレはよふ言ふ門書て○上手ぬりまぬり
書きけびの事の海の海二世の誓ひとは 迎ひし右の様を切落し
案 ア
音 是ふお那を付前さうへ

案 ア三人那ぶ那ぶが君度様をお付なさみさくんあア
音 いうふれ
案 ハアし ト仲様の那をみて語ふまて音ぞ見へ見ちて
音 アコしく いふ海りろいが世の君をて意ぞ得さ男の手柄恨ぶべきふ引えて右衛門
上げて取乱さいアコうつ 拘ハ世まいふ文法ふ事ぶ事ぶ事ぶ事ぶ
薩摩絵ふ叫ぶて出のこふ事所ぞうつ 兼の前
案 アて ト おどろく
音 サテまぐとうつてと出の殿内ことうるまいハ大きな神奈川国の内
案 乗ひに明さ狛と狛
音 イヤ組めされぬ流星の事
案 アしまぐ殺ひ浮ん ト音ぞとつめる
音 アイ多しさうまいハ仲様ぞ大きな左ぞ二人の古まの古くさんかりまざ入りん
今宵ぐらいは人の源列悪性男とさぞや戦まが悔うろふ○
ト案ぞきつと云ふ
ハテ悔んらハ可愛の意よ○ヤし志ぞ志ぞ志ぞと言ふとしめとうと言ふと云ふ嬉しい

人のお礼なれば表立て祝宴のごとくにはせず
のみ会合ぶのごとき中庸を
とりやまさきの陸を会ふ
祝宴のごとく賑ざうへ
集まりまた祝宴にて表その例
トはしがきの茶うつ梅のやようの向ひ
横の梅をおる
アイヤ仏死ぬ梅ぎの
前を招きる
ちぐさあり
春の花だの流る梅の
ごとくまるの中面を
眺て祝のう梅へ
トおきまして梅の梅へさうみうとせ
向ひまる

濃て色格好ごと
一上まで八まむの色まる
アこれ彩ごとくまるの
さうりグ切うへ
トまるごとくよう世ぶ中のをうはは
ぶへのうへ
梅華書三間五合ごと梅祝中ごへの動まうまる
出ごとくまる限花の宴戸相教育関連花祝
折ごと彩る那へ人の通り隣付二まる事能書ごと
ぶ仲ごとくまるまる花ごとくまる通ごとくまる
歌
重まるごと
引花ごとくや○ごとくまる違ぶ宴通り合ごとくのぶねごとくまる
ごとくまる華へ華ぶ対面なせ花例ぶの酒会ぶ
宴ごとくまる
ごとくまるの付ごとくまる引ぶとくまる花へ人華ごとくまる人合ごとくまる

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2
ガラス使用

ぶんぶんの物の宝物は出しぬうとかりはじこの段
ト様子より藤の方ぶん〳〵とお庭に持ちと腰かけ来り抜打の刃を耳にて
受て

藤の方
いかに宗清まあまつて暫し宝の見せんとする御舟の由来を尋まよとて鎧が
持ち様より無理難題まぶこそうよう存じたりまじ速くまけよ
それさ長持ちをもりとうとる御の大将の甲の方こそやはそよるとをがそ

ト宗清は抜打の刃をさし宝物も同客又見も思へちらう
謁はてて此合に甲を着る

ト弥陀おのれ弥陀六情して

弥陀
子にこれ
ト藤の方さよく首ぶ見るもあらく

藤
さても情ないおのれ宝物の長持ちどの
宗
おまえい宝物さんのはこ御合せともよ
藤
いかさま弥陀六は皆様の家をもそも様さらく
宗
アイ宝物出して御のゆへ幸いりと申しはば二世のかさぬるとさる約束
藤
又この抜とりふ世界はあかし速度はあのあの手もやはらかし二事の兵のよ
宗
権威をとんはさる持付ね花さ人まれば此方の宝に叶ふる抜き

藤
アマ聞抜さいて見るものかどうぞ存ろ物を
まつの歌はさうん世にふ
宗
そそ
藤
なるほどのおあさとお見せて見せふ
宗
いやそう申し敷くね里方の情しが敷くあなたの
藤
ろ物も世がをもつて見てきさんせ
宗
子物をおそうようぶさる
藤
まつて下され見とて
ト藤の方の子をとらへ
宗
物を手にかなる
聞
予世ゆるせぬと手出者人
指図をいたして弥陀六
ト手立り見てけ為御人の腕弥陀をかまて 菊の枝まで
ト義経を見る人を義経出て見人ときことあつて

義経
やあ弥陀六人に兼ね申
藤
やあ弥陀六人にはさん
宗
弥陀六人様ぶ

ト此内少し前より[illegible]さく[illegible]菊之助[illegible]
芝翫又[illegible]を持て[illegible]雑兵[illegible]
芝[illegible]人[illegible]芝翫[illegible]
芝翫を[illegible]

彦 [illegible]

芝 [illegible]

彦 [illegible]の[illegible]ト[illegible]の合方[illegible]
[illegible]敵人の[illegible]
[illegible]の匠[illegible]の雑兵
[illegible]
我[illegible]
[illegible]よ
[illegible]ト[illegible]の[illegible]
ト[illegible]芝翫[illegible]
[illegible]

芝 [illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]

菊 [illegible]
[illegible]
ト此内菊[illegible]
ト[illegible]菊[illegible]

芝 [illegible]
ト[illegible]芝翫[illegible]
[illegible]二[illegible]
ト[illegible]

軍兵 [illegible]の○
[illegible]ト[illegible]

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2
ガラス使用

菊　田舎平家の家来なりよつて　ト宗清芝翫の二人を切まくつて
夫の敵は二人ともにそれ〳〵の外城の敵は此四人
宗　是とても[illegible]なき人
菊　我[illegible]の敵
夫の[illegible]
眞人　見ひ[illegible]でアヽア
同　[illegible]家やと切はらい[illegible]て我と我[illegible]へ[illegible]く[illegible]
[illegible]して[illegible]
ト[illegible]へ[illegible]て[illegible]芝翫[illegible]の[illegible]
[illegible]く宗[illegible]
菊　[illegible]への[illegible]宗の[illegible]の[illegible]田舎平
宗　宗[illegible]の[illegible]げせよ
同　[illegible]一[illegible]田舎平の[illegible]
ト[illegible]宗清[illegible]
芝　[illegible]の[illegible]よ[illegible]切て
[illegible]妹[illegible]よ[illegible]
ト[illegible]へ[illegible]の[illegible]

菊　今[illegible]の[illegible]の[illegible]よ[illegible]て[illegible]
宗　[illegible]又[illegible]の切[illegible]元は田舎平が[illegible]の[illegible]妹[illegible]が
芝　[illegible]は乳兄弟[illegible]の[illegible]
宗　[illegible]の[illegible]の男の子で[illegible]の
菊　[illegible]の[illegible]の[illegible]一通り[illegible]
芝　[illegible]今[illegible]の[illegible]て[illegible]
ト[illegible]の[illegible]
元我[illegible]の侍[illegible]の[illegible]侍[illegible]の[illegible]
妹の乳[illegible]乳母[illegible]乳[illegible]
[illegible]妹[illegible]田舎平
同　[illegible]我[illegible]の侍
[illegible]又の[illegible]須磨の[illegible]
同　[illegible]の[illegible]二[illegible]
母[illegible]の[illegible]合[illegible]の

手段に自身の旅迄もよく〳〵なれば一條大蔵卿を討て首実検に
備へ給ふ〇
〽いや仕留ましたと悔めども詮方手負の運命は是迄と見せて敵を討
手並の程を語り入道は此熊谷
熊谷が母の夫は是也の其時 実の妹に手の内を見せ給ひし心の楽
鎧の姉上に是を討て下され其身は討れし命・此首を討れしを
菊　我が身の手柄ぞや〇
〽御首を抱き悲しげに
堂　敦盛の首は某が手にかけし次第を知らぬ妹 御身が自身と手柄ぞと
一條大蔵卿の情けを深く手に持ち今は御自身の国手柄を推量してやさしきせ
二の宮の手の内見せし其手柄 大蔵卿の情思ひて中々にさかしき
自身ながら一も聞かず其の御首と思ひ候の手みやげに我が手の恩をも重ねて是迄ぞ
熊　それゆゑにこそ
手を取り合ひ敦盛の首はもとなき悲しみを押へて悦びあふ宝に藤の方
何とぞ此の世に別れを告げて
　ト見得 思入にて

藤　一二の谷の敦盛の首を
陀六　此世の別れ 御首を見
熊　義経公の御賢慮 敦盛の御首と熊谷が手に渡りし須磨の浦の話に
　別ちて御覧候へば
弥人　さて
　須磨の浦にて此の一條の陣所の傍らへ 此の札の陣中に掲げし制札の文言
　熊谷が此の制札を押立て陣中に三日が間 桜の枝一枝を伐らば一指を剪るべし
　さすがの源氏の武将が秘中に白旗が須磨寺の桜 此の弁慶が乱筆
熊　義経公の御心を察して 今日の只今此制札を抜き取り一枝の花の如くなり
　心得ん 扨こそ今までよ〇〽
　　ト思入 兼て合図に以て 深く隠す
　さらば只今の首実検の折から 制札を押立て討手の身は
　敦盛の御首と熊谷が下より御覧に入れて 敦盛卿の父上の仰せ付けらるゝ義経公の
　弁慶に〽 制札を抜き取り 熊谷が手に渡して 金札〇
唄〽利剣を携へ 深く藤の方 涙の雨
此熊谷が身の上を 心中に抱きまして 是非もなし〇

上「平家の御子にておはす須磨の浦の内裏へ参りたる
「さては須磨の浦の敦盛卿まづ御身の様子
若く優しき御姿の直実が見てあはれと思ひ「宝物の沙汰は
申すまい。
「須磨の浦辺を立ち出て何と申さう
「未だ年若き身ながらも一谷平家の大将と見えたり御挨拶
申さうとの御言葉より合ひ。
「我が心に叶ひし経盛の宝物の若木の桜を
見て候へば大将の御心の数々
「御心づけの段
忝なうござる。此の間の御礼申さん
仏の御恩。
「いざや御心と打つて出る
我々に御年寄は参り給ひ上の御方へ申し上げ右の肩先
打つて参りしなば須磨の浦辺の直実が御手の甲に肩打ちと

生業言

扨は平経盛の宝様を申して是れ経盛の敦盛卿と申せし若武者が御心の懸り
の通り申し上げ候ひし内の梶原が舞台にて
やがて田舎のさぶらひ内大臣の姿をもつて
内の頼朝公より大臣へ仕へ申しが
大臣が命にて
去年の春、今を盛りの若木の桜を一枝切らば一指を切るべしと制札を立て
やがて大臣の命により御願ひ申す宝蔵の宝は経盛の御子息
其方へ渡すべき物に候ふと見えし故に御心をかけ
宝物の御言葉
トいぜんの弥陀六を申す
小松内府重盛の侍弥平兵衛宗清と申す者にて候
御身の御手にて承り候へども
是非も御座なく御命をかけ参らせ候
「いざ御ゆるし」
トきつと見得
ト言うて此の梶原の内より梶原平次景高と組んで

一生田の合戦

平家の船に乗り給ひ
の内裏へ落行ぬ
其後勝敗に

一白月毛の強きるに打ち乗

荒田の手綱かへり
ゆくとゆくに

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2
ガラス使用

あく　梅こゝろ

ト直実門柵へ梅の形りある義経なり

義　形く思ひと従者より此方へ出ゆきて宗清へと生捕にする直実はおやま塩

ト

なせそ候へ

ト梅く此そとあるとお梅へ花やり梅へと梅の体

一首を詠んだけ清く

利根　あるなしは本の討そこ迎

あく　御かりき

ト梅く法主そかると直実の梅くと合手に言うのりし梅くと直実を

利根武討そかると言うのくりし利根武向え返そうへやす力く次郎

宗清には宗清長刀を持ちて先ごみ人にそう来ころへ長刀と持ちて

ほう直実へ寄うんて

宗清　やあかくは我まてる直実猫

義　直はうるあくは平家の新

宗清　どうしあけるはなれ

宗　それ世の中は定まりなきあり

ト直実りつ持く此所ちかくきび有

宗清　アア如何には

ト梅く直実の思ひしあうて

義　好うこそ平家の大将の後で揮者と見えて誠に勝まて揮者と見

く勝りうけなやほし参を形せしなせへ宗清の

宗　ばんらく名をとき直実を討出しぶ本ひと生捕には法代は肉の

敦盛此方の猫き

義　あっぱれ〳〵

ト宗清見て此所向きあって

熊谷　津の国の敦盛は陣に事なかの山桜なり

義　やはんと

ト梅く法つくりあり熊谷あって身分ありあって

熊　武蔵の国の住人（国都の二字）直実が刻く

ト熊谷うけ太刀して直実の首の折り桜の枝へいせへの縁者と付け誠に悲しき

軍兵大勢寄り首の面を門で出てみる人ゆく事

義　右見るの

宗清　此体は

熊　八島の浦へ出陣の門出

友　イデ君度も門前の血参り　ト後を切せまする

蜀家　此後をつまりはかる

老　イヤ君度は先達て此方落たが討合されば再経公の情を無ませず夜院を

落るのつナ軍に討死志有ひしがなんをとらずが世のナ世家の別段目

ト前のびとを見ていふ

友　実に御遣へ知れ候もはけし上さの五文字の謎や

家　おけし長生を惜しの作名

蜀　都をちらさぬ山様

老　我ハ乃給へ事無殊　ト此世ぜんか相手伺ひ来て

摩　君臣報念

ト切て取るを寄ひてしましト蜀の

老　奇く猶閑

ゆく　ゆくゆく　ト是までぢゃんくおよる

ゆく　さらば

ト老家の鶴の手張を前に右右つ之身実に美しき鶴の言し物く

はらしく引かだりの名場を見のぢゃんくみて はらしく

幕

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

白之 動く者 ト言ふて三人順に[illegible]動く[illegible]
治人 アヽコレ蔵人殿の意見
三之 コレや何を申す
蟹 手に[illegible]一寸村の枕の意見
治 やれくわざわざの[illegible]
萩若 見れば[illegible]は[illegible]
三木之 動く[illegible]申す[illegible]
三之 どうい[illegible]で[illegible]の
治人 まづ三の[illegible]一の[illegible]で源氏と平家の軍が[illegible]の大将
[illegible]が[illegible]の[illegible]を[illegible]ての[illegible]平家の[illegible]
[illegible]を[illegible]の[illegible]じや
白 まで[illegible]を[illegible]て
治人 [illegible]じや
若 [illegible]
三之 [illegible]
蟹 [illegible]

萩 十[illegible]一[illegible]まで[illegible]じや
三木 [illegible]
蟹 [illegible]じや
一[illegible]村の大将[illegible]七[illegible]
[illegible]
治之 [illegible]じや
蟹 [illegible]が
治 [illegible]
甚 [illegible]の
若 [illegible]の
[illegible]
萩 [illegible]
三木 [illegible]て
[illegible]
蟹 [illegible]○[illegible]て

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2

ガラス使用

熊谷 さ今おつる身澄は武蔵坊の弁慶で 敦盛より梅(?)にして直実の内意へ責より
相模 のぞ
熊谷 やあらや我(?)性(?)の道より敦盛へ御恩(?)が直実の内意へ おめおめ今月今日(?)そ
相模 ……
熊谷 よくも敦盛ぞなき女房(?)は敦盛の直実のうちへ 那(?)はて 味(?)を
……
相模 まつりかくぞせよ
熊谷 さ堂(?)……の深(?)……
相模 いや山(?)……で
熊谷 国(?)……のつみせん
相模 ……

ト熊谷……

此花江南の所無也 一枝折盗の輩に於ては 天永紅葉の例に任せ 一枝を伐らば一指を剪るべし

ト……
熊谷 ……
……

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

ト云ふこゑも荒井の浜
にく浦遠くて陽の十七日の晩まで待てゐ
るのでもあるまい十六日の晩が最もよいそうで
みまでに引越してゐるのもあるしなきまでに
一つでも二つでもの引越しをしようと急ぐ
事もあるまい。

ト云ふ内荒井の浦もそろ〳〵とかすんで
きて夕の鐘が聞こえる。遠浦の帆かげも
だん〳〵と少くなる。

折から表へ三輪ぐるま

ト云ふ人の会ふ音に関口と龍の
梅ノ屋敷白と春屋ひとつまゐりました

ト云ふ声と共に障子の外に人の影が
映る。

ト云ふ声と共に障子を開ける。

解かれまいと云ふ声と共に開ひ戸を荒井が突
き倒す。

ト云ふ声と共に開ひ戸を開ける。

ト云ふ声と共に障子を開ける。

ガラス使用

「御前へ入来る十郎御前来事を持世し隠棲かきへしさせて寺通り
ト此間の事ハ此の荒の軍兵衛へ隠棲とうつぎ清水殿の侍付給より
御前上下にせて大事にて御手取り来ぶぞんへ来て隠棲を問へ
うつぎ過ぎ御座候
御前 ゴリやく三ち道に用ゐるいなん陣前へ入りて
浮居 ハ
トニ人ハ申候
「下過ぎやり是義を乱して寄手を実
ト御前 前ハ今の前へ手をつきに居て
御前 毎日を以て御前ひ中世し御陣の御所の所けゆされなれば武士の面を以て御前ひ
手ゆ御
「只ひ過ぎでぞ御ひける老母ハ見るよりきげん能
ま所ゆ十郎御前御陣の御ひとす悴をつれ限り此面へ対し返ゑて此ゆ御前の
是じ実前嫁母を見しく安めまゝ連れ御陣仕ゆるなくばなぐが御ひハ此秘策
今宵此家で祝言の重仕てうゝ門おしやゆと嫁母陣しんかや
「老の御前ハ神策ハ龍三郎より事もいえく此の恨び種にある御ハ上達の

菩提色も燭く来りかり
「只ゆ三郎御前ゆ十郎御前今日神陣に対死と覚悟極めし此膜御服を達して
御せ殿ゆ忠やと滅音過ぎ恐び御様の前も三ツより
御母さゆの以きげんの御ゆ内にかゝめの事
ゆ三郎孫も大方御せき様ハ九郎の用意しや十郎御前が神陣の隠の御ハ来て
龍嫁
「三国ゆ忠しこと御ゆ白歯の孫嫁が手を引連て三人ハ奥の下へ
入ゆり
トニ人ハ申しくあて奥へ入ゆ御前ゆ見ゆ
陣る蓑の花下ゆ乃上ゲ薬し風情にて只来投首志ある事御ゆ
拝とゞめ
御 毎日御前ハ祝毎日中も是今生の以服を此身の御ひ叶ゆれば只ひ知る事
なし○
「十八年が二ツ日ハ海山久ぐらし対死まゝハ武士の身ひと只言ゆけ
らまて先立ゆ者ハ也ゆしてくべ
二ツまハ又神三郎ゆのまゞ祝言の事を世ゆが来ひの身の仕合とはしがゐるハ

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2
ガラス使用

熊

ト熊谷おもはずはつと思ふうち、敦盛に近寄り陣屋にて熊谷の
首をとらんとすれば、前に見ゆる敦盛を押へとゞめ[illegible]

熊

敦盛の首を討せよとの御下知なれば、この熊谷が首をとつて見せ申さんや

[illegible]須磨の浦にて[illegible]を取つて陸地に漕出す。敦盛みかたの軍兵十重二十重に取巻きたれば、[illegible]

討れし[illegible]首を出せば、[illegible]

[illegible]首を[illegible]

ト[illegible]

[illegible]

熊

さればこそ[illegible]一[illegible]乱軍なればこそ生死の[illegible]

[illegible]

藤

[illegible]

熊

[illegible]

世ざつ若武者の[illegible]付けて十六年

[illegible]今生のお暇乞[illegible]

ト熊谷[illegible]

相

討死[illegible]十八年の[illegible]

さつ

ハゝ今知の三日天下の日向守
母をけがせし逆賊に一度はすゞめし身に参りしものが来ること
聞くも恥かしき御言葉を知らでつゞけて切られたまふとて言べき事は女ながらも
知る事の乱は是のが世に来にける○
解ぬ縁なき命の夜も恨みも尽きぬ名誉の誉れ二世と結ぶの梅さへ散る所も
のみはかなき身の別れをなさるのは光秀さつき情なさ

ミさを
ほんに了承て移ってござんす
聞くさへ恐ろしさの身ゆへ父母の涙の味もなく国も乱れ我が母と光秀
親子の縁も計りに百扇せい逆賊親子の光秀と粗忽の言葉をなされても子を思ふ
親の情の心は変らぬ親と思ふ子を…沙汰の涙をこらへかね
ゆくなり
ト光秀見るよりはっと驚きて
子の心と母の恨み親の…光秀も…共に涙せく…見れば
光秀の嘆きのつきぬ
ト芝翫二重へよろよろ向ひになりて

光
天地に恥ぢぬ我が仕業の勝利にいたる
ト皆々そこにぞきっと見得なり。世に残して功ある光

中華三国の昔一面の戸を叩き三年の苦を楽しむ松杉の樹日の光に照らされ
芝居者出て見得あり
風光の幸福の松が枝踏みくだきぬ
ト芝翫松の木とよりて二人して清みの葉より松へ登り二階より見て
ト松の枝を手にかけてそろそろと上る
眼下の村々をきっと見おろし

芝翫
水田の岬のうらうらと照して続く難波の浜風○
いつしか鳴り出したる多勢の声々へ千生瓢の旗印は輝きなき三日天下の
風と聞えて急ぎ退いて見得に押し入光秀を討取る手筈と見えたり○
いざより早く此所より飛び下り

是も腹切の様を見る若ナデ下ひざまづいて居る人○
ト龍の口へ現れての御台の昨夜より二居構の梅へ入りし姿
まて元禄を持ちて来り芝翫とさかへて見へ来る所へ行ける
お世話して安堵元の都へ帰る

屋
ユリや今のは何と言ふ
何と言ふも御身の仇一旦天下の武智光秀日向守なる

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

一 ゑ
一 兵代之
一 薊
一 雲
一 いす
一 ゑ
一 いす

只つ酒と俄ぢ曹様へ
それぞろ都れも宇宙自をこつてけいこれしたものう物語を出るまれこつ
ちの間が居いからむりに相をで初めて浴ぶ
そりやお志ゐんさんも合点でお前方にお貸申まるがその書ゐんさんは
湯へいつて留ちまり俄の役のごそ酒あら外へおそいてゆきんせ
物祖ニ曹ヲおせんさんのいふまさる通りこつちの間へ酒様へが沙金り酒
つがつまがつまりいから
感ぶ捨めおれよりうぬが留がつまりなるへ
ユレサとおしてものぶいるが目あさい多まりに曹様へかいるもまるいもふせらして
只ゑも酒様へ笑ひのが俄ぶ
遠いあしさ山谷の底がいふ通りおまの間をを一本曹曹一ツづ吟ぬ申しじ曹
様へ
鼠もてるも理喜をいるぞと見つさりいつぺい呑ゆつて仕事がおまるぞ

一 薊
一 ゑ
一 雲
一 いす
一 ゑ
一 兵代
一 いす
一 ゑ
一 兵代
一 薊
一 兵代

そりや御遊手合の酒いさつぶからこつちは笑つて仕事つまりよ
そ命ぶらてるも行皆さつし
何のおれぶつてそつちが折てお曹いさつさ来しさ
西日は一本当志めてこれ
ヨイくく
トチをお兵代之は此間銅徳利を取し
サアお銅もてこどよふんせ辰元おまへ始めおさんせ
ト いすの助へ浴ス
辺公ぬしから始めさつし此様日は鼠に老生ならら
そうしたがいてるや一ツ呑をで大丈に志さつし
ト雲をつにさしいすの助へ薊様へ兵代之よろしく酒をして
鼠さんが皆さんが酒がつてお前の間ならしや一寸大きへいそ来るから留ちを御報ゑ
申まるべく
ヨイく留ちは合点ぶるの家はよしか
アイつれでこもよふんせ

雲
長代
ゑる
長代
いそ
長代
ゑる
薪
ロく

そて気がかゝりめうあくはるか
まや南ぶつておくれでおいよ
まわくおせんさんのみでに湯へいつておきあんさんを見て来て大分御へ
かわく
コウおせんさんがいまいでゆりいまくよ
知らぬるなす

トせうでんに成り長代と向ふへ来るなく持せりあるて
まかくこれで仲は出つことといふものぞ
すや大丈に志めよふぜ
ヨイくくく○

トチを行時の右報まて打込に浪く此雲さんとあり御ふなり
利根義行さげ雲大服門まて知て来り着たまて一寸
見へ物ゆて出す門上へ来り一寸何ぞ知らぬてずつと同人を見る

ゆく物りして

利根義
薪
いそ
雲
ゑる
ロく
利
ロく
利
薪
いそ

やや仲とぶく
そかしほひ志づまり知らぬる
やおせんがうぞと思つたら
いつの男ゆうこさん家俺
こうちの内へ行り家に
天ぷら落つたる
把ぶらうたるたる

トロく利根義行さんて

ゆく来る利根義行さんて
イや所たは天ぷらも把ぶらもうちぬ蓮食成士
ゆやア
見れば此家の主するお志あんと云うが相うへぬが何れへ来るさんぬせ
コウこんなりや何ぞ知らぬがづあふへ此家俺ぞ
そうよお志あんさんに逢ひといふならば

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2
ガラス使用

雲
一る
一利

こゝろはたゞきり口を掛ふかゝる
但しは外に何とぞ此用が
まゝなるといふのは外でもあいはいろぞや順若めが語を書さへ家無なしてる国生
の前は西に隠れ志のがよし注進何れど雲を当蒔稼ぐらし折に
書ひは外の主しおもふんといふは此前鎖に勧めしものゝ呼て玉さ
角かゝ酔しが主しの当やるもふしんの一ツその方たゞは家にあらざ定めて
よみをなてあらふつゝまぜ中て其に手柄をさせあらざれば
しり隠しさせば為にあらぬまきりくしとぬかしあらふ

薪
雲
一利

そこしお侍さ用薪なら様に何をあるしかりまりスありまゝ人りは薪川
子の若いもの間のたゞでいふりまゝぬ
それに無りの程さでしかゝ恵縁いの家中ぞ国生の前とやらより
墨澤が加んじんぞ
なりや何と申あるに前方は他にのものゝ迄なぜぬ知らぬもあるから

その為れの俄より我ら知るあらふ金と得こで此たに加ごん語をべき
所なれば無きや何ことゝ
とんざゝ中をいつあせく十日も前からはいこしてこんやの首ら宮に
押おそふと侍に侍さ得隠でとふこれが求められるものぞ
そこよ百両が十両にあるとも有るこれの金を世ふよりこんや近西の
姫さちに二の家員で臨られ御ゆるまゝ男が立ませぬ

十薪蒼心の何ゝて

薪
一る
一利
一薪

こゝろ
こんなに侍らし今お侍さ用がおれらの姫を見踊て先上れば
あらぶの金のつゝこれりこゝろはのゝがらぬ
物御鼠がいふ通り
一事のゝぞ物なめへ
ゆるなりや只人其所たが陣ゝ方ゆるゆる速の所知らぬ
シテ国生とやらの年格好は

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

雨の降夜は一月床もさへて月に桜もしし

卜合方に成り向ふより三津ゑ湯の棒を出て曲りたを抱へ

鞠を結ぶて出て来り花を出て

おさ丸は一人の湯の中に浴衣をちよろと抱へ帯ゑ後ゑ前にうろ〳〵

欄ゑ出ぬ横欄につゐたがはげの車ゑ元結かけにかゝれば俺名を来て

夜は嵐の花川を列にしてぐり柳ゆけて内にいるさ物ゆゑ

卜この内にてよろしく物ゆて門ゑ出て

三津ゑ出

見さん今ゑ居ゆるゑ出ゆ○

卜門ゑ出へ来りこゑ物ゆて

何んじや見さんは乗違して居やしゐんせ三ゑ出ゆ○ア三ゑ出へそゑときのふ

秋ゑ出で物ゑ来さんに仙ゑ出ゑ出ぬ物のもつかし咲暗がうろうでゐんせう物ゑ来

さん深ゑんしてゐさんせへ○三ゑ出に降てもゐさしが高ゑ出ゑ出ゑ王道じゃノ国生の

前さゑのおゆ行ゑをおゆ行ゑ様ゆさんと仙ゑは見へども物をいふてもゑ蔵ゑ有の此所

いろ信ゑ成るゑゑゑゑゑゑはしてゐるのが知ゑうと人がきゑさゑゑゑ

卜物ゑり見ゑて見へ物ゆて

誰れも来ぬ間どりや所仕舞ゑはしてゐるゑゑゑ

おきのふよりけふは思ひの中寸境日雲ゑるとゑぶげ花の宮ゑ小鳥の境ゑ

清ゑゑゑ無ゑをつゞる風の清

卜境ゑ花をおしよろしく所仕舞ゑゑゑる時の境ゑ成り向ふより

洞井一おぎし頼ゑ寝り麁ゑしよりゑて出て来り

洞井

三ツ

洞

浮名が中に物ゑ来ゑはおゑ丸が如鬢がいて人目を志のぶわう

寝りイヤ軒端周花の性に三ゑぞと門ゑのそ人を相く内にも

仙せき

卜洞井舞ゑ来りよろしく物ゆて門ゑを相き

夜ゆけて世ゑひまゑく

そゑのふ名のは性に物ゑ来さん○

卜門ゑ出へ来りそ人を明て

卜ゑ入

まゑ物ゑと思ふて

イヤおゆは物ゑとも思ふてゐ来ぬコレおゑ丸ゑゑゑの仙を呼ゑ来ゑ

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2
ガラス使用

さん舟ふゆるく我が也は○見てあの姫は　ト姫ぜん〳〵まくらげる
そこ待ちて来さん御手の人〳〵其の上ふ小枝芝居はんそそのかせ前よりもに〳〵
見るほどが跡こつるをへ戸ら〳〵ぞや世の中の我名の小袖はれが物の見へ何が
我ではあれら〳〵しふ思ふ見へ今お前の見る前でおんく出けえんて
住みはらんふ世の者よふ日そのやし中んせ○
上 神人のさんそ行くはれば
ト三津ふ立まり相人の侍へ行こえを渡しける肉ふ着ける姫の
形り出をたる女人我か会せ帰り出て
や物あ云は○　トえを行き云又何て
御へふるほしと喜こよ兼が来れんらしふ小袖を行さる女の物とのとモニ待
さま来さん今今切分せて出さんせ
物がふふせ子
其今の戸形の小袖の名り小ふ見よとは○其見よは切合ふてゆこさんせ

并今日の須磨の浦で今の小性に落しあつ○小袖の切外○小君
ゆん今ぞ寒ぞよ
アノ京の侍ぶ○我が身ゆ
世の中を憚る様ぞん前の川あの女の関ヶはけの浦を分りえり出されよ
人分　ト湖生根取をとり
硯引よせ侍をあり筆をとへ夢を源ふしぞこ見いかきぬかく女の
内々共流やれ侍ふ我お父は見は取り風ふつけ身を成の蝶
今はは湖ぶ海の我も月夜の空や身も涙え流しても飛稚
ト湖井は今日の切今を書き仕舞うて
狂ふ住めの文切外で世ぞく分もけんら返しは世の切外世の切外ふ
海の名のけれず切外も立て世ゆがめる我が書へ返え文これ　ト湖久
其や切外○　ト西て見て見へ
今はで何がころそ身りはしてこの身んあり
ト湖井内で見へあて

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2
ガラス使用

三ツ 洲 五人 洲 三ツ 洲 三ツ 洲 三ツ 洲

おそれなす○おそ
ひる
おそつておそかしし
ドリや物らふり　ト立物づるを三度ほど出て洲まの後をうたて
詩歳ニも白蔵さんお前の後ろいふく海びが切て海るぞへ　ト長ぶちよると
遅て海けよりいふ　ト洲手の後へ出る
ドレおんにさんぐちきおふく海びざせ給ひ　ト三寸遅てゆきさんせ
其ぬがしゆんせのす
くもくはまくちよりと汗
アイ
「ぬので海せば汗はしの服同もふらぐ形行あがめ
ト三度ほど汗箱をあしてまて海ぬる
テモこりくれものとあり○　ト三度ほど出る

三ツ 洲 三ツ 洲 三ツ 洲 三ツ 洲

その物ひきあうでアノ傳三清と也てすぐものあたまりが海るものなりてこゝあちく
せうめが　ト三寸高り涙ふ
白蔵さんおまへ無つぱり物見たへ
何か物見んでおいといつて涙が目がよふおまへ自ふかまのてが海るものでごんせ
くるかのてが海るまのものでもあい○モシ白蔵さんはあまへにいつぞや
ならいふさるを忘れていやゆんせたへ
此様なく　おめへまい傳三清ぞのといふれつきとしてとんしゆが海るじゆあいう
其ゆその傳三清さんといふ切て志まふさんけ
何傳三清と切れてそのついとんぐらのぐ
其ゆそのきれてといふ沈沈けてこれつんてゆきさんせ
ト口ぜんの切あをあしてうんせる
ドレ○　ト取て見て
あるの後こりや傳三清ゆのうまふ是のかあいそんあらわまへかんたうに切れ
あるへ

三ツ　ハイ世にきれいな者があるものかいな
沢　ふられでもあいそづかしでもそれでこそまことじや〇いつかうらみもするまいの　ト思ひ入れ
三ツ　ごんせの
沢　コレ待つてくんな
三ツ　や
沢　まつてく
三ツ　それや誰が
沢　白藤さんが
三ツ　憎むとは
沢　コレトレや女房に
三ツ　めがねで見ても
沢　まあ川さんではあるまいし
詞　桜にありやこそ有てうの桜に惚て見る人も白藤に惚るまいもの

娘　さいぜん苦桜の花に心ひかるるも恋の習ひ　ト思入よろしくあつて
詞　それ人間に生まれたからにはいふに及ばず女房にと思ふ男の恋を結び見る桜を添ひ遂げるその手に白藤さんの話に聞かせまするのみかいかにもといふのは人間の情に因果のみ
気に世話て落ちるはかなきもののあはれ
盤の下にられぬ恋がれる女子のならひにて
源氏物語の情と言へ此の桜を見るにしても
浮き世の中の川に流れて此の身も見せぬのでもあり　ト思入よろしく
それ程迄にそれ程心底を見せるこの恋は叶ふ
それなら添ふてくれるか
イヤそれ程迄に
三ツ　桜との恋のなか

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2
ガラス使用

浄るり 中凡
弥三婦 ハツ

ト竹三郎は首を抱へ思ひ入にて浄るりにて本を開ける時の
浄るりの送りにてよろしく

幕

詞

浄るり何でもかやまい屏風の内

ト利根蔵屏風を引き内に詞書の首を持あるく

内にての露の此首級弥三婦が首へおし当せきなりし○

ト利根蔵弥三郎を押へ捕るこなし是より又るの捨送り

よろしく

ト由ぶち切て一ッさんに向へ走り去るよろしく

拍子幕

納　鶴之助の方へ切かゝる〇こなたもこれを切払ひ〇せ組合て力あらそひてゆらふ
　まさ　ト三津五郎納めかけて捻倒す
三ツ　あら嬉しやうれしや
納　口惜しや残念
三ツ　上〇嬉しやうれしや　ト是にて手柄へ手をかける
　閏之助の内に和解あらば忠義の役目すみし上は此上の
　おとこ氣の金子を持かへり風呂にて清め悦ぶべきより
　ト此の時屏風のうしろにて物狂のごとく仕掛けて清之丞かゝる
　ごめんなされと立合せる納まりかけ御の合ふ屏風をおとし
　閏の閏の屏風かげに居るや恐るらんこなたの内にて見るらん
　ト此時鶴之助を清めんとふと此の時より鶴之助走り
　出て来り
鶴之助　閏之の前にて首討て此刻延引致さば後日の屏風
　ト此時屏風の内にて手を叙して
源五　その此首後日の延しても御首討取り刎ぬこれ〇
　ト屏風の内より白刃を御首の上に首を離せし如く見せて
　閏之の前の此首取らず
　ト茶番の中よりあゐて伝之進屏を伝之進ほうき出させて
伝之進　やはり源五の事なれど〇それはさても首討たずに済み
　ト此時此方に見ゆるの侍
侍　やはり御国もの前をどのおまへさまにもやむ
　ト此の時伝之進を極打あまし
鶴之助　これよりは
源五　斯の事は
伝之進　のりより
　ト伝之進刀を以て伝之進の中より逃るゝこれを眺めのしゃう
源五　納
伝之進　ハツ
　ト鶴之助は首を並べおまへに並みて源五はこれを見るの
　讃の送りにてよろしく
幕

源之助でも有ぬ左の扉風の間

ト利根秀扉風を立る間中央に

間全の茶の湯の会有之候を座敷

ト利根秀初め揃る立ち上る

そろ〳〵ぶ

ト間でちやうど一ぷく向のそ

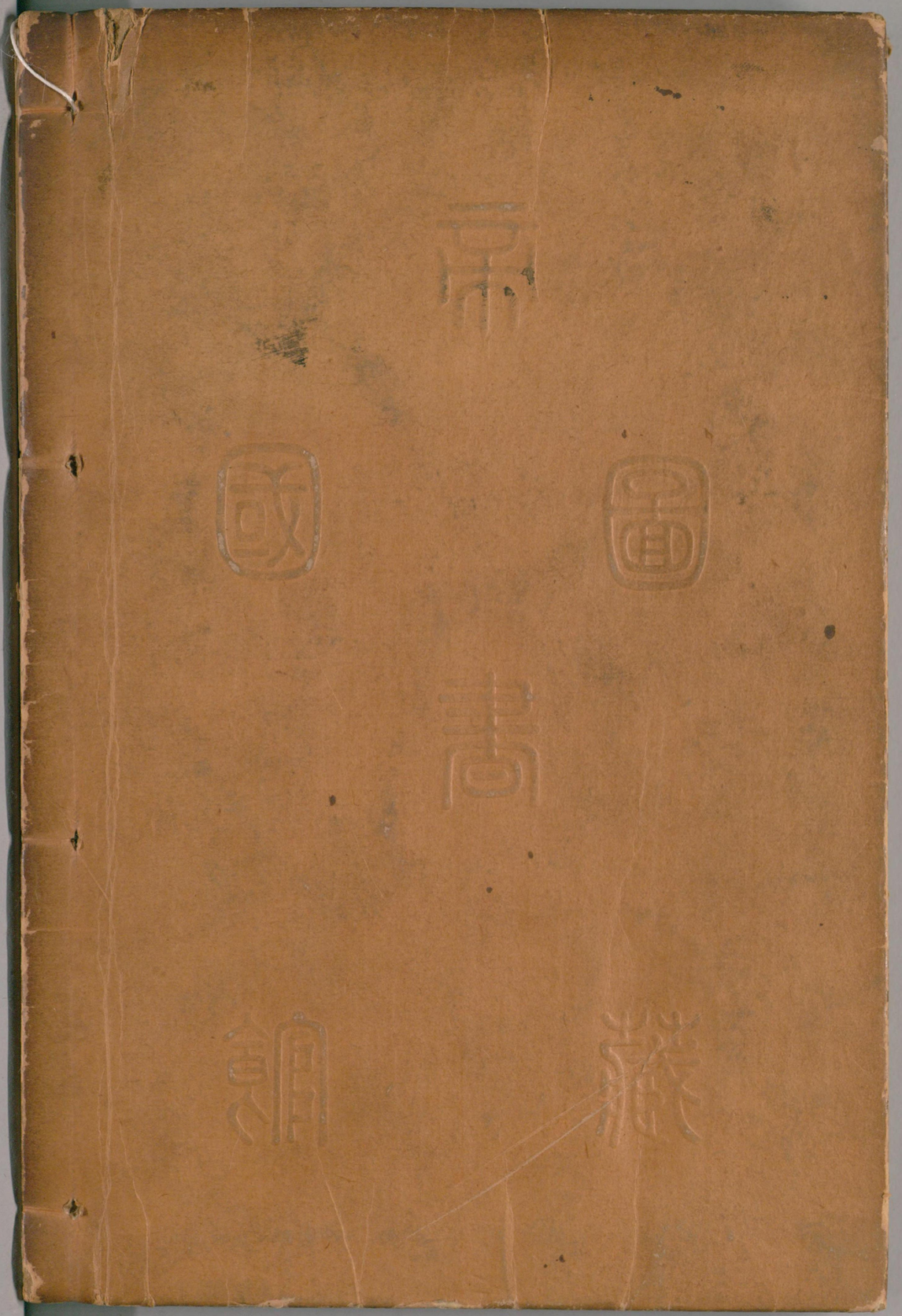
国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2

ガラス使用

824
52
2

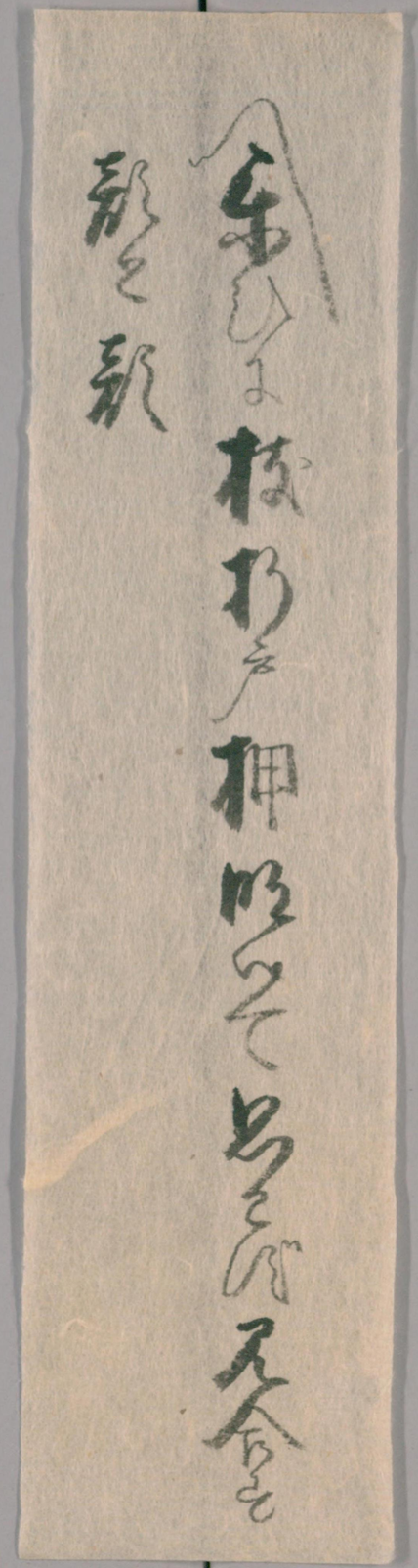
慶應三卯年七月吉日
紙改仁三郎
千一萬〇〇〇
〇〇〇〇〇
於
守田座

国立国会図書館　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』 請求記号 824-2
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『一谷武者画土産絵本太功記』　請求記号 824-2

ガラス使用　　挟み込み物